

ちいさいゴドモの事故

1962
作品ナンバー0050

文部省選定 厚生省推薦

この映画は、当時日本の幼児の事故死亡率が世界第1位にあったことを背景として、子供の事故がどんな時にどんな所でおこったかを、事実に基づいて調べながら、子供を育てる親だけでなく、すべての大人にもその対策と予防を訴えている。



無人踏み切りで死んだ子供、用水堀に落ちて死んだ子供、横断歩道ではねられた子供の話から映画は始まる。次に家庭内での事故、これはお母さんの不注意で起こることが多い。乳房で窒息した赤ちゃんの例、掃除中ビニールをかけられて窒息した赤ちゃんの例。はいはいができるようになった幼児は、どこへでも這っていき、縁側から転がり落ちたり、タバコやボタン、時には硬貨や画鋸まで飲み込んだり、熱いスープ鍋ののったテーブルクロスを引っ張ったりする。それを言葉で叱っても効果はない。2階のある家では、階段の上下に柵をつけて幼児が転げ落ちないように、登れないようにしたりする注意も必要だ。

幼稚園児から小学生となると、行動半径も家庭内から外へと広がる。子供は遊びの天才である。そのこわいもの知らずの好奇心が子供を死の淵に立たせることもある。子供たちが存分に遊べる遊び場がないことも問題だ。自転車遊びなど、往来や路地で遊ぶ子供たちに交通事故が多いのもこうしたことに遠因がある。一方、広々とした自然の中で育つ農村の子供たちも事故に無縁ではない。ふたのしてない肥だめに落ちた子供、まちがえて農薬を飲んだ子供、急流で水遊びをして溺死した子供。こうなると大人は、あれもこれもだめだと禁止したり、叱ったり、子供の成長を歪めることにもなりかねない。遊びは子供たちにとって社会生活体得の勉強にもなっている。最も必要なことは、日常生活の中で、子供を事故にあわせるかもしれない潜在的な危険を取り除こうとする大人たちの配慮である。

記録
16ミリ
白黒/21分

- 企画
全国地域婦人団体連絡協議会
- 監修
厚生省
- 協賛
生命保険協会

- スタッフ
- 製作
山高しげり
 - 脚本・演出
丸山章治
 - 撮影
高橋佑次
 - 音楽
大野松雄
 - 解説
宇田川清江